



ギャラリーバルコでは、今年10月より月1回程度のペースで若手アーティストを中心とした企画を継続的に展開しています。第二回目となる11月は、アーティスト小川真生樹のキュレーションによるグループ展『The Real Rio』を開催いたします。

The Real Rio

大島佑樹 / 小川真生樹 / 神山貴彦 / 衣真一郎 / 宮内昂 / 村田啓 / 山形一生

2013年11月23日(土)-12月1日(日) [27(水)のみ休廊]
12:00-19:00

オープニング・レセプション: 11月23日(土) 17:00-20:00

Gallery Barco | ギャラリーバルコ

東京都葛飾区亀有3-27-27 LA CAMERA 1F (JR常磐線 亀有駅南口よりアリオ亀有方面に徒歩3分)

www.g-barco.com

キュレーション: 小川真生樹

コーディネート: 新藤君平(ギャラリーバルコ/アソシエイト・ディレクター)

不条理な感覚

—— 風呂桶の中で釣りをしている狂人というよく知られた話がある。精神病の治療に独自の見解をもっている医者が「かかるかね」とたずねたとき、気違いのほうはきっぱりと答えた。「とんでもない、馬鹿な、これは風呂桶じゃないか。」と ——

これはアルベール・カミュの「フランツ・カフカの作品における希望と不条理」という文章の一節です。常識的な価値観を備えている人間なら、狂人とは浴槽であたかも何かが釣れるという幻想を抱いているが故に狂人なのだと思ってしまうでしょう。しかし当の本人は、なにも釣れはしないことを知りながら風呂桶で釣りをしているのです。これはとてもナンセンスなことだと思います。しかしこれほどまでに不条理でありながら、狂人の意識が冴えている事も確かなのです。つまり、不条理と論理性とは過度なほどに結びついているものということではないでしょうか。

私が作品を作るとき、私はなにかを理解しようとか、なにかを結論へ導こうとするのではなく、逆に新しい疑問や、自分でさえもわからないようなことをしようと思っています。作品とはカフカのように不条理であるが故に論理的なものなのだと思います。それがどのような意味を成しているのかではなく、それがどのような不条理を成しているのか。私のしていることを私は理解している。しかし、私の理解していることがわからない。私の理解していることがわからないことを私は理解している…。私は何も釣れないと知っていながら釣りをしている狂人にどこか親近感を感じざるを得ないのです。

今回私が企画展に声をかけた6人の作品もどこかそのような不条理を抱えているように思います。彼らの作品は当然のことながら六人六色です。しかしどの作品もなにか一つの事実を強く言及する作品ではないように感じます。言い換えるならばある意味では言葉の少ない作品なのでしょう。強く言及しない作品は観る側に多くの余韻を感じさせるように思います。それは決して完成度が低い、なんの意味ももたないなどという話ではなく、多くの言葉を内在しそれを感覚という経験で表し鑑賞者に思考の起点を与えるような、思索の種を植え付けるような事象としての作品ということなのだと思うのです。

私を含め、この7人につよい縛りや共通項はありません。ただ、私が一人の作り手として、そして鑑賞者として彼らの作品に接した時、私がなんらかの感動と不条理性を感じ、このような機会を得たことは事実にはなりません。

小川真生樹

近年、現代美術の潮流のひとつに、意識的に意味から距離を置くような表現が増えていきます。それらはある意味では、モダンアートが背負わされてきた批判性や意味性からの逃避ともいえるものかもしれません。しかしながら、明確な意味や意思から距離を取ることで、かえって物事の真理や深淵へと近づくこともあることを、それらの表現は示しているようにも思います。

小川真生樹が言及する「不条理」に対する自覚は、そこに含まれる矛盾(批判性から離れることもまた一つの批判性となりえること)さえも俯瞰的に取り込みながら、表現の新たな地平を探る試みといえるものかもしれません。

1987年生まれの小川を含め、今回参加する作家はみな20代半ばの若手作家です。特定のスタイルやメディアに囚われることなく、独自の美意識を追求する彼らの試みをぜひご高覧ください。

新藤君平 / ギャラリーバルコ アソシエイト・ディレクター

大島 佑樹 Oshima Yuki



L : COVER PAINTINGS / 水草, 枝, 油彩
R : BROKEN PAINTINGS / 壁紙, 木枠, 油彩

小川 真生樹 Ogawa Maiki



L : Swival Chair / swival chair, motor
R : Helium and air / black swissball, 4/B_R

神山 貴彦 Kamiyama Takahiko



L : Untitled(Hold a egg, drop a egg) / oil and acrylic on linen
R : Untitled / emulsion on linen

衣 真一郎 Koromo Shinichiro



L : 人と風景 / oil on canvas

R : 木 / oil on canvas



宮内 昂 Miyauchi Kou

例えば

ピザを棒のついた円盤で切り分け

よく出来た紙の箱に収める

それが彼と私の仕事

だとする

ボスの出で立ちはあまりにも惨め

白いシャツは脂まみれで

幾つもの食品に染められている

もはや白いシャツではない

シャツなのかどうか

ところでかれはこう言う

明日が無限に今日に詰め込まれている

明日は今日なのかもしれない

何とも言い難くセンスがない

そもそも時間の話などする事がセンスが無い

今お前らが大事にしている

そーゆー幸せを俺はかなぐり捨ててきたんだよ

てゆー絶望で

形から入っている

あとは連続すべくして連続している動作

これは彼にしては上出来だ

暗喩を用いている

過去とか未来の話をしているようで

結局は我が身の今

我が身の今

我が身の今なのである

相手に連想させることで彼は可能にした

しかして

連想したのは私だ

私が時間の事を考えていることになるまいか

そーともとれる

しかしその場合彼は連想させたのだ

このふたつに因果関係がある

ならばどちらかひとつでは成り立たないのだ

どちらも成り立たないのだ

そもそも どちら ではないのだ

ひとつのものがふたつに見えるのだ

これでは私は属しようがない

しかしそーゆー事をひっくるめて私かもしれない

だとしたら私とはまさにこれだ

結論は先に出ていた

何か複数に見えるだけで

本当はひとつだったのだ

だから私はいない

たつた今私は私を消して見せた

私自身に対して

無かったものを消している

二重否定だ

マイナスとマイナスを掛け合わせると

当然プラスになる

結果私は再び現れた

以下は連なり循環する

これが全体像の様だ

何かが締めくくられたような気がしてくるのではないか

ところでこの一連の運動を別の次元に投影した場合

これは点線

ないしは、点滅に置き換えることが出来る

そう見える

相対時間が同調しているならば

それは絶対時間だ

絶対時間と1と0の明滅

これをコンピューターが再現出来ない道理はない

問題と云えば

次元を復元する方法

げんげん

信号

信号機ではなく信号

ゲームボーイのことをそお呼んだりするのが彼

村田 啓 Murata Kei



L : Jonathan's work / mixed media

R : takaraorori / mixed media

山形 一生 Yamagata Issei



L : Untitled / chair, cloth, microphone, light, speaker (マイクで外部の音を感じ、認識した音のテンポやピッチで光の点滅の早さと、音のピッチが変わる)

R : Untitled / cloth, motor, sensor (人が同じ空間に居るとモーターが作動し、布団の中で人が呼吸をしているかのような現象が見える)

本展に関するお問い合わせは shindo@pesora.org (新藤)までお願いいたします。